青森市の埋蔵文化財 11

# 山　野　峠　遺　跡

## （石棺墓移転に伴う発掘調査）

## １９８３

青森市教育委員会

# 序　　文

青森市の山野峠遺跡は、昭和8年の青森県視学官佐々木新七先生以来、昭和12年の東北大学喜田貞吉博士、昭和45年慶応大学江坂輝弥教授にいたるまで、その発掘調査の報告は学界に大くの貢献をして来た貴重な遺跡でありますので、市としては、慶応大学の江坂教授が発掘調査をした箇所を埋め戻して保存してきたのですが、非常に残念なことに附近一帯が最近採石場として急速に開発されて現状維持が困難になりましたので国・県の補助を受けて緊急に再発掘して、保管して置くことにしたものであります。

近い将来には、史跡公園のようなところに復原して展示したいものと考えております。

今回の再調査では、7基確認されましたが一基は新たに発見されたものであります。

本報告書は、これまでの調査の成果をまとめたものでありますが、執筆の葛西励先生の御労苦に対しまして心から感謝の意を表します。また調査に参加された調査員をはじめ関係者各位に対しましても厚く感謝申し上げる次第であります。

昭和58年3月

青森市教育委員会

教育長　安　部　健　五

第1図　全　測　図

**本文目次**

1　はじめに……3

2　遺跡の概要……3
3　調査に至るまでの経緯……4
4　調査方法と調査経過……6
5　石棺墓の配列……7
6　石棺墓の構造……7
7　出土遺物……12
8　まとめ……16

**実測図及び土器柘景国**

第1図　全測図……1
第2図　甕棺出土状態……5
第3図　石棺墓配置図……7
第4図　第1号石棺墓　……9
第5図　第2号石棺墓　……10
第6図　第3号石棺墓　……11
第7図　第4号・5号石棺墓……12
第8図　第6号石棺墓　……13
第9図　第7号石棺墓　……14
第10図　出土遺物……15

**写真目次**

写真1　遺跡全景（航空写真）　……17
写真2　遺跡遠景　……19
写真3　調査スナップ　……20
写真4　石棺墓の配列・第1号石棺墓　……21
写真5　第2号・3号石棺墓　……22
写真6　第4号・5号石棺墓　……23
写真7　第6号・7号石棺墓　……24

## 1．は　じ　め　に

本遺跡は、古く青森市久栗坂遺跡と呼ばれ、1934年（昭和9年）に喜田貞吉博士が『青森県出土洗骨入土器』と題して「歴史地理」第63巻第6号に紹介してから著名になり、我が国の石器時代の墳墓研究上極めて稀少価値の高い遺跡であることは周知の通りである。

墳墓遺構は峠を挟んで両側に認められ、東側で検出されたのが喜田博士らが調査した人骨入甕棺群で、西側のやや上った傾面からは1967年に江坂輝弥氏らによって、箱形に組まれた石棺が6基一列に並んで発見されている。

このように甕棺墓群と石棺墓群が隣接して発見されている例は他にも2～3例はあるが、本遺跡が初めての発見であり、そうした面からも本遺跡は標準的な存在となっている。

甕棺遺構の方は喜田博士の調査後、1970年に青森市教育委員会で同じ場所を調査したが新たな遺構は検出されず、現在は上水道の給水ポンプ場が建設されている。石棺墓群は調査後埋め戻して保存し、現在に至っている。

ところが、遺跡の付近一体からは通称「野内石」と言われる板状ないしは柱状に節理する岩石が産出することで古くから知られており、その採掘も古くから行われてきた。最近の採掘技術は進歩し、短期間のうちに地形が変化してしまうほどである。こうした現象によって遺跡の破壊は時間の問題となり、その保存対策について関係者間で協議され、石棺墓遺構を再度発掘調査し遺構を移転する措置を講ずることとなった。調査期間は1981年（昭和56年）7月25日から7月31日までの1週間を予定し、葛西励（日本考古学協会員）の発掘指導のもとに、高橋潤・高坂一夫・小笠原幸範・塩谷隆正が調査員となり、永井治・山岸英夫・小山彦逸・高橋隆志・林亮の大学生が補助員となって上記の日程で調査が行われた。

## 2．遺跡の概要

遺跡は東北本線浅虫駅の南々西約4㎞の地にある。青森市久栗坂を縦貫する国道4号線の「観音寺通り」バス停より山の手に入り、峠を越えて青森市山野部落を経て矢田へ向う山道の峠を登りつめた部分が本遺跡である。峠は西側青森湾にのぞむ弁財山と東側田頭山の中間鞍部にあり、標高は石棺の存在する部分で98㎜、甕棺の存在した部分が93㎜程である。峠から北東には久栗坂の町並と浅虫の海岸線を遠望でき、湯ノ島・裸島なども見え、南西方には三角山の大森山の見える眺望絶景な地である。青森県遺跡地名表には01001番として登録され、地籍は青森市大字久栗坂字山辺89番地の1で地形は向斜面向斜地形である。

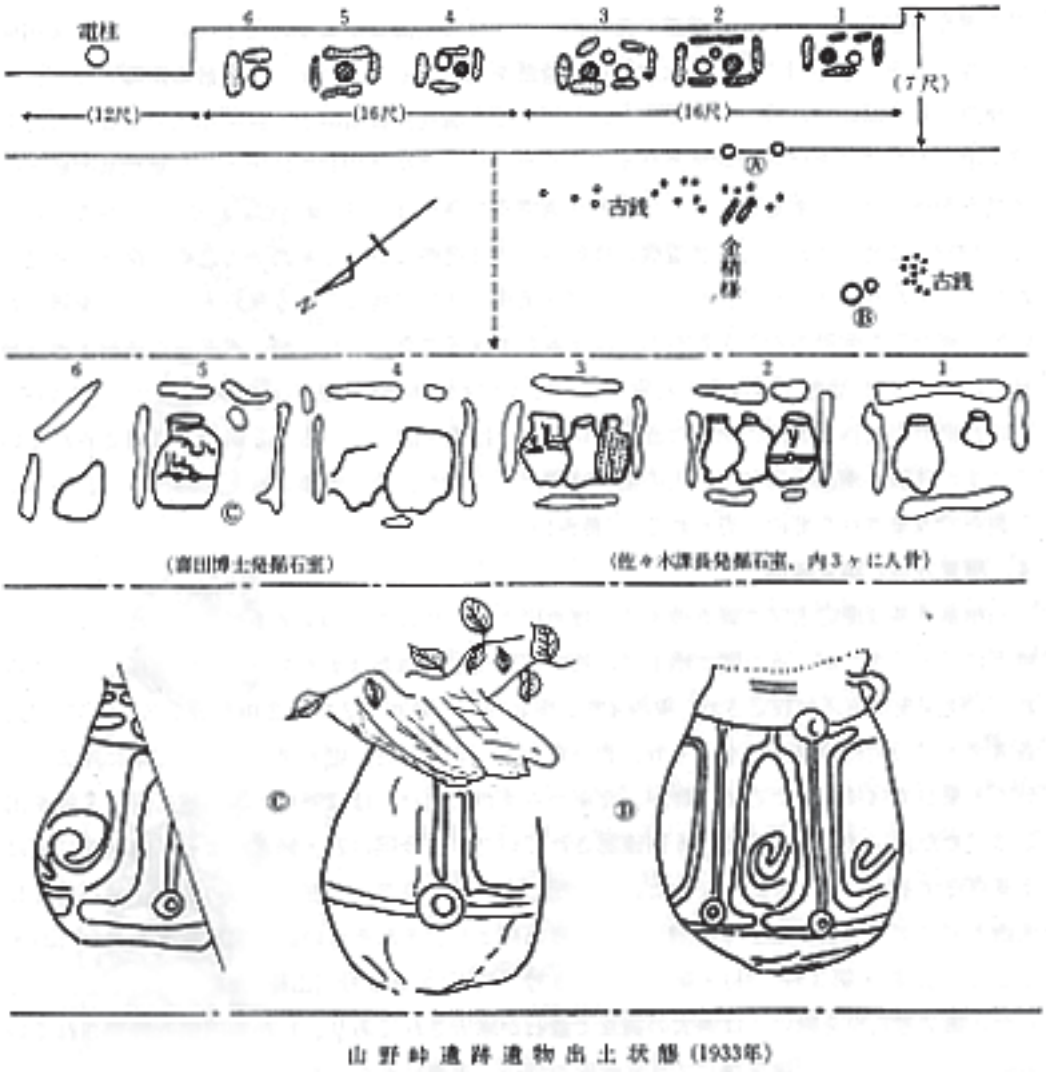
付近には大浦貝塚（縄文後期末・晩期、中世～近世の製塩址）が青森湾に面した海辺に、東方の平野部の奥まった宮田には長森遺跡（縄文晩期）が存在する。

### 3．調査に至るまでの経緯

本遺跡は1933年〈昭和8年）11月に発見された。この年の秋、旧野内村久栗坂から旧東嶽村矢田へ通じる村道の拡張工事を救済事業の一環として野内側で実施し、村境の峠頂上部まで拡張（道路幅19尺）を行った。この折り、11月17日道路の西側で2個、東側で2個の甕形土器が発見され、11月23日村民の連絡により当時県の教育課長であった佐々木新七氏が実査し、続いて11月26日佐々木氏の連絡により喜田博士の調査となった。人骨を納めた土器は石室状の遺構の中から発見され、石室状遺構は並列して計6個発見されている。うち南側3個は佐々木氏の調査で、北側3個は喜田博士の調査である。発見当時の模様として喜田博士は「歴史地理」の中で次のように述べられている（原文をそのまま掲載する）。

「（前略）扁平な石材を以て四方及び天井を繞らした小石室が高さ約二尺五寸、幅三四尺位のものが、約十六尺の間に三個まで並んで発見せられた。かくて其の最南の石室には二個、中及び北の石室には各三個の、明かに石器時代品と認むべき甕が安置せられてあった。甕（は）高さ1尺乃至一尺五寸位其の内外共に、後から流れ込んだ土壌を以て充填せられ、中には洗骨を加へたと思はれる人骨の、ほぼ其の形を保存して居るのが三個あった。越えて二十六日に余輩たまたま佐々木君を訪問して此の珍ニュースに接し、早速同君の東道の下に、前記諸氏と共に其の北に続いた場所を発掘したところが、ここからも同じ様な小石室が三個並んで出現し、其の最南に二個、中及び北に各一個、合せて四個の甕が発見せられた。其の小石室の所在の前方には例の小石棒状の自然石が多数に存在し、発掘に従事する土工等は、数日来の経験により『又金精様が出た。ここには屹度甕があるぞ』と見当をつけて鍬を加へると必ず石室に掘り当てるといふ程にも、陽石と甕とには密接の関係があるらしい。金精様とは此の種の陽石に対する俗称である。其の甕にはそれぞれ大小精粗の別あり、孰れも土圧の為に小片に壊れては居るが、発見当時には完全に其の形を存じて、何等攪拌せられた形跡を認めね、其の三室四個の中、中室に安置せられた一個が最も整って居たので、今は東北大学に送って接合復元中であり、在中の遺骨は長谷部博士の鑑定を求める事になって居る。（後略）」（喜田1934）

その後1967年（昭和42年）9月1日～6日まで慶応大学の江坂輝弥教授が、前述の甕棺墓群より道路を挟んで西側の崖面を調査し、新たに6基の積石塚組石棺が1列に並んで発見されている。石棺は東北から西南の軸をとっており、不規則に重なっている数枚の扁平な安山岩の積石を取り除くと、下に底面に平石を敷きつめた箱形の石棺が存在するもので、棺は長軸が約150㎝、幅50㎝内外で、足を折り曲げれば遺体は楽に収められる大きさである。またこの石棺群の西南より列外に石囲を伴った甕棺土器が1個出土しているが、電柱埋設により破壊されていた。（江坂1967）




**山野峠遺跡遺物出土状態（1933 年）**

1）発掘の第１の古銭は，ほとんど地表面近く古木葉混りで出土し比較的錆少く寛永通宝多し

2)▨ は人骨のある土器で朱塗り，１つの石室に必らず１ケあり

3）発掘の小土器は破損紛失して完形なしＡは復原中

4）金精様は大小合せて３ケ

5）A,B 小土器

6）C 比較的完全な人骨のある土器

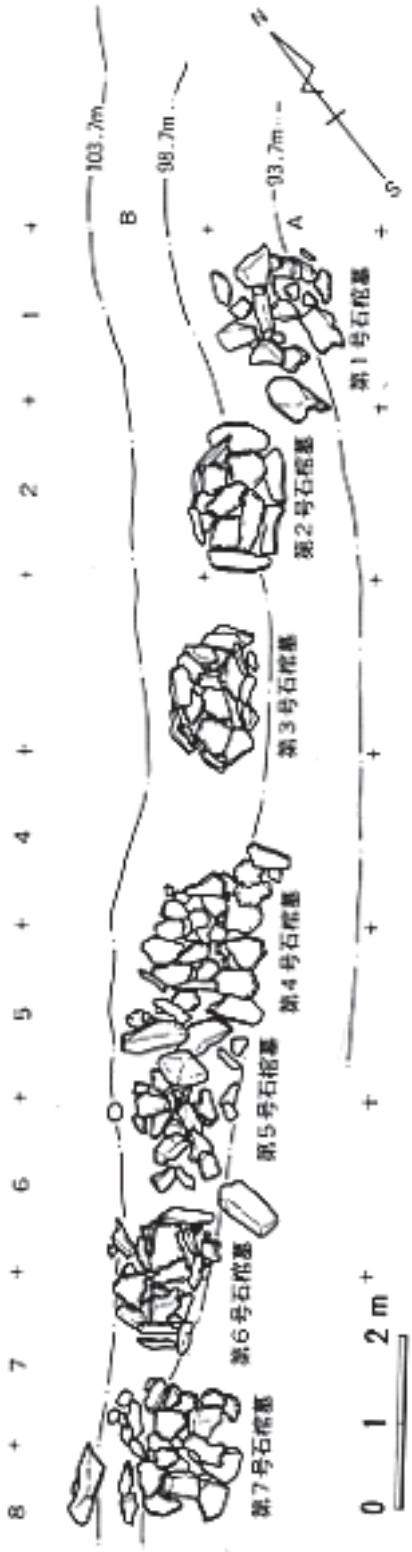
7）D 蓋としてある石くずれ落ち，破損している状態を見る事が出来た

**第 2 図　甕棺出土状態**

更にまた青森市教育委員会は1970（昭和45年）年7月26日～8月2日まで、道路から東側斜面を再度発掘調査している。調査の発端は、近在の浅虫温泉が夏季に渇水にあうので、矢田側から浅虫方面へ水を引くための水道管が本遺跡を通過することによって、最短距離となり、その埋設工事が開始されることになったからである。調査は喜田博士・佐々木氏の調査された部分を中心として、更にその背後及び周辺にも及んだ。当初は1933年に出土した甕棺墓の続きの発見を期待したのであるが、新たに石室状遺構及び甕棺は発見されなかった。この調査において、1933年に発見された石室状遺構の残骸が、ほぼ道路に沿って南西から北東に帯状に発見された。いずれも板状の石で、かつての石室状遺構の底石が残っている部分もあり、北東隅において、直立した側壁の石と天井石が、ほぼ原形を保って発見されたが、内部から甕棺土器は発見されなかった。甕棺土器はこの石室の東側に3～4個体分棄て去られた状態で出土している。更に石室群の南西と北東の両端に直径1mほどの巨石を配していることが新たに確認されている。また残骸の南西側列外で、人の歯が11個出土したが、特に埋葬された形跡はなく、かつての調査で放棄されたものと思われる。（葛西1975）

**4．調査方法と調査経過**

石棺基6基は慶応大字で調査後すぐに埋め戻され、今日まで10年余手がつけられることなく地下に眠ってきたが、その間に地上では雑木が繁茂し、調査はまずその雑木の伐採から始められた。伐採後発掘区が設定され、東西4m、南北16mの範囲で2m×2mを最小スクエアとし、各スクエアの名称は東→西をa・b、北→南を1～8とした。堀め戻した土を丁寧に除去していくと果して14年ぶりに石棺墓群が、北東から南西に向け、ほぼ98mの等高線に沿って頭を出しはじめた。14年前の調査では6基確認されていたが、今回の表土剥ぎによって南西端に更に1基存在することが明らかになった。各石棺の名称は北東端に存在するものを第1号石棺とし南西方向に従って順次第2号石棺から第7号石棺とし、それぞれの調査担当は第1号（小山）・第2号（永井）・第3号（林）・第4号～第5号（高坂）・第6号（山岸）・第7号（小笠原）とした。第7号石棺を除いては過去の調査で蓋石が除去されてあり、しかも内部も精査されているので埋土を除去した後洗浄して写真撮影を行い、実測にかかった。実測は原則として10分の1とし、平面図・断面図　（長軸・短軸）・側壁の側面図を作成することを原則とした。第7号石棺はほとんど原形をとどめていない状態で検出され、側石が斜面に飛び出したり、蓋石もずれているものが多い。覆土は十字に切って精査したが、遺物は出土しなかった。各石棺は実測図作成後、移転復元のため個々の石材に記号が付され、一枚づつ慎重に取り除かれ、レベル測量も合わせて行われた。石材は各石棺ごとに一括してトラックで運搬され、第7号石棺を最後に1週間の調査を終了した。




第３図　石棺墓の配列

**5．石棺墓の配列（第３図）**

７基の石棺墓は、北東～南西方向に第１号石棺墓から第７号石棺墓まで15mに恒り一直線に存在する。そのあり方は等高線に沿い、ほぼ98mのライン上に主体的に構築されてある。最も低い等高線上に存在する第１号石棺墓と最も高い等高線に位置する第７号石棺墓との比高差は5mで、遺跡自体は約15度の傾斜面に存在する。つまり北西部が高く、南東部が低い地形である。第１号石棺はA－１のほぼ中央に位置し、標高的には最も低い93mの等高線上にある。第２号石棺はこの石棺から約70cmに北東端が位置し、主体はA－２にあるが若干B－２にも及んでいる。第３号石棺は、A・B－３からA－４にかけて存在するがA－３が主体である。この石棺から北東方約60cmに第２号棺の南西端が位置する。第３号石棺から南西に約1mに第４号石棺の北東端が位置し、A・B－４に主体がある。またこの石棺と重複する形状で第５号石棺が存在し、B－５・６に主体が及んでいる。第５号石棺から更に西方に20cmで第６号石棺の長軸端が位置する。この石棺はB－６・７に主体があるが、A－６にも若干及んでいる。第６号石棺から約40cm南西に第７号石棺の蓋石の北東端が位置する。第７号石棺の蓋石の範囲はA・B－７・８にちょうど半々に跨っている。これらの石棺は、磁北が全て対角線上に位置する。

**6．石棺基の構造**

本遺跡で検出された７基の石棺墓のうち第１号石棺から第６号石棺までは、1967年９月に慶応大学の江坂輝弥氏によって発掘調査されたものである。６基の石棺墓は発掘調査終了後、11月23日に青森市教育委員会の手によって埋め戻しされ、その際に慶応大学で調査した蓋石の一部も埋め戻しており今回の調査で６基の石棺に蓋石が存在した石棺墓については、埋め戻しの際に流入したかその後に棺内に移動したものと思われる。今回の発掘調査で新たに１基の石棺墓を発見したが、第７号石棺としたものがそれである。

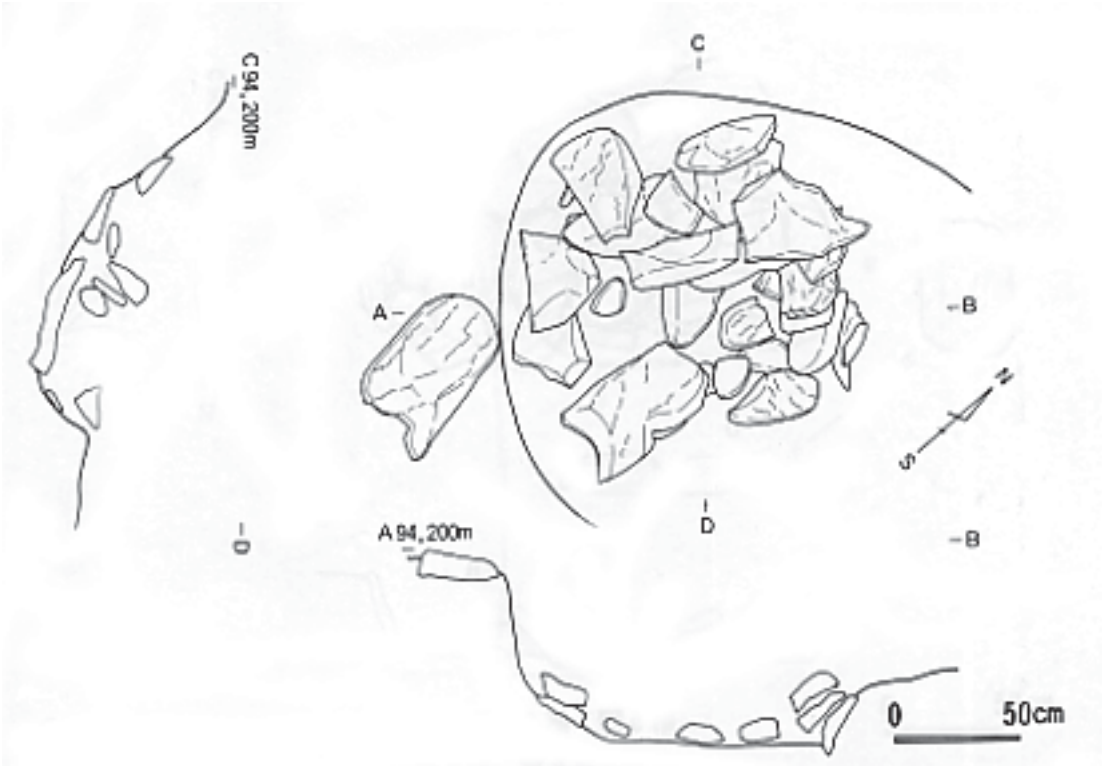
従って山野峠遺跡には7基の石棺墓が存在したことになる。以下、石棺墓ごとに記述することにする。

第1号石棺墓（第4図）

A－1のほぼ中央部で検出した。石棺の平面プランは、崩壊が激しく明瞭ではないが掘り方で観察すると略長方形を呈しその断面形は側壁が外傾する形態である。石棺の長軸が北東から南西方に位置するので、主軸方位は石棺の対角線上となる。壁石は、北東壁の掘り方面にべったり貼り付いて底面に約5cmほど埋められてある。他の壁石は掘り方面に貼り付けられた状態である。壁面は、北西壁が50cm、南東壁が25cmある。また北東壁が25cm、南西壁が70cmある。底面には安山岩の平石が敷かれてあるが、長軸面に長さ15～20cm大の平石が設置されている。この底石は、底石との間隔に約10cmほどの空間がある。短軸面には、長さ50cm大の板石を中心に長軸面同様、底石間には10cmほどの空間をもち2ヶの底石が設置されてある。石棺内での計測値は長辺が120cm、短辺が90cmを測る。また掘り方は長辺140cm、短辺110cmである。

第2号石棺墓（第5図）

1967年に慶応大学で発掘調査し、その後考古学ジャーナル13号紙上に掲載された石棺墓である。A－2の南西隅で検出したが、B－2にも若干及んでいる。蓋石については、1967年の調査で除去されているため認められなかった。従って本稿では蓋石の状況を考古学ジャーナル紙上に掲載されてある実測図を基に知り得る範囲で記載することにする。蓋石は全て板状節理の安山岩を利用し、石棺の上部をほぼ同範囲に覆ってある。石棺の北西部には50cm大の平石を2枚設置しその上部には約25cm大の平石を4枚積み重ねている。更に南東部のものには、50cm大の平石を壁石に接し3枚の板石を設置してある。また棺内にも30cm大の板石が8枚ほど崩れ落ちた状況で入っている。蓋石除去後が第5図に示したように平面プランが略長方形を呈し、それぞれの壁石が若干外傾する。北壁の壁石は70cm大の板石を1枚長軸を横に設置し、更に40cm大の平石が折り重なる状況で構築されてある。ちょうど反対側の壁石は、北の壁石と同大の70cm大の板石を長軸を横に設置してある。東側の壁石は60cm大のものを2枚組み合せ構築してあり、対壁は50cm大の板石を2枚重ねて設置してある。底面には7枚の底石を組み合せてある。南側底面には長辺75～35cm大の平石2枚を長軸を縦に設置し、北側底面には長辺40cm大の平石を長軸を横方向にして設置してある。石棺墓の計測値であるが、石棺内の長辺が160cm、短辺が90cmで探さが40cmある。掘り方も明瞭に把握でき、北西側で確認できるがこの石棺墓は掘り方ぎりぎりに構築してある。



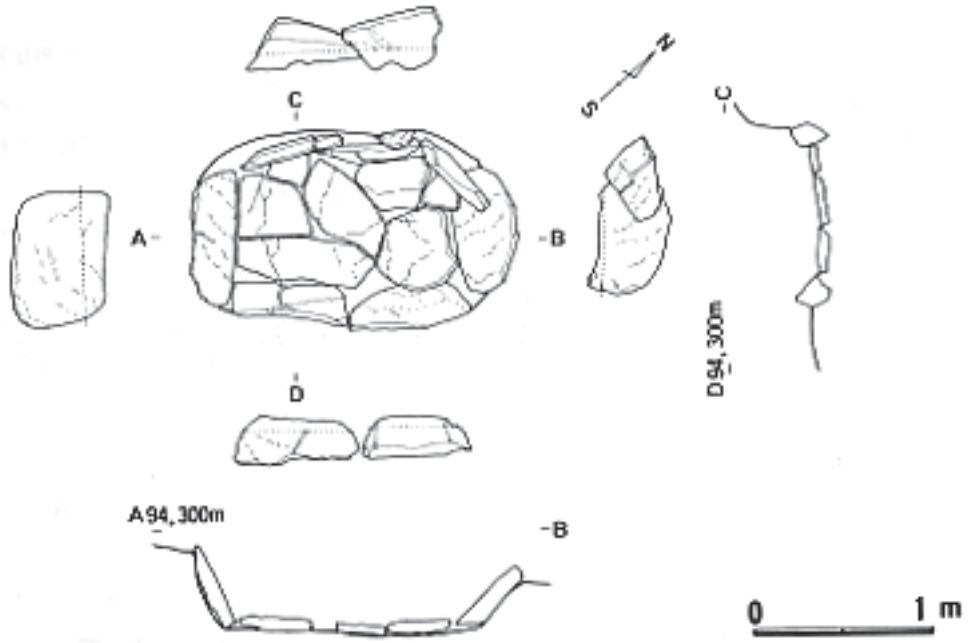
第４図　第１号石棺墓

第３号石棺墓（第６図）

Ａ・Ｂ－３で検出されたが、Ａ－３に主体があり若干ではあるがＡ－４にも及んでいる。平面プランは、不正方形を呈するもので構築面が傾斜していることに起因するものであろう。北東壁の壁石は30～50㎝大の平石を１枚設置し、それにあててある。対壁の南西壁には、30㎝大の平石を２枚組み合せて壁石としている。いずれも平石の長辺を横に設置している。北西壁には、４枚の30～50㎝大の板石を配置し壁石としており、それぞれ折り重ねた状態である。対壁の南東壁は、６枚の板石を用いほぼ垂直に設置され２枚重ねで構築されている。壁石は、ほぼ30～40㎝大の安山岩を用いている。底面は、40㎝大の板石を巧みに組み合せてあり石棺中央部の底石は長軸が横方向となるように配置してある。その他のものは長軸が縦になるように設置してある。石棺墓の計測値は、長辺が160㎝、短辺が90㎝、探さが約30㎝ある。掘り方も明瞭に検出され、北西で掘り方の一部が認められた。他の部分は、掘り方に板石をぴったりと貼り付けてある。

第４号石棺墓（第７図）

Ａ・Ｂ－４・５に跨って検出されたがＡ－４の北西隅が主体である。平面プランは、第５号石棺墓との重複で明瞭ではないが略不正長方形を呈するようである。北東壁の壁石は１枚より検出されず、長軸を横に設置し40㎝大の三角形の板状節理の安山岩を用いている。対壁の南西壁は30～50㎝大の板石を２枚組み合せやや内傾状態で設置してある。南東壁の壁石は、４枚の




第５図　第２号石棺墓

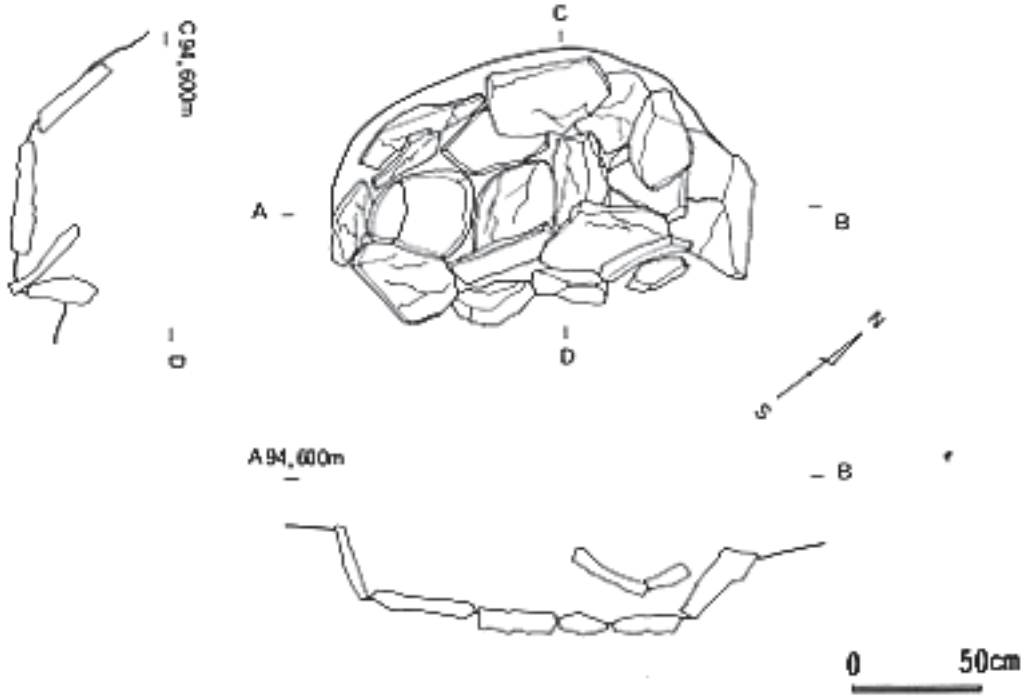
平石をたくみに組み合せ外傾するように配置してある。平石は、ほぼ40cm大のものを利用し長軸が縦となるように設置している。対壁の北西壁には、壁石が認められず掘り方面が露出している。底面には40～50cm大の平石を配置し底石を構成し、底石の隙間には10～20cm大の板石を配置し隙間を埋めるべく工夫を凝らしている。石棺墓の計測値は、石棺内の長辺が130cm、短辺が100cm、探さが30～40cmある。

第５号石棺墓（第７図）

Ａ・Ｂ－５・６で検出されたが崩壊が激しく、蓋石が壁石に利用されたと思われる板状の安山岩が部分的に積み重なり他は平面的に200cm×100cmの範囲に散乱していた。第４号石棺墓から40cmほど南西部に70cm大の板状の安山岩が外傾する形状で２枚検出され、うち１枚には40cm大の平石が重なって検出された。また、北西壁にあたる部分には50cm大の平石が３枚外傾状況に設置され、壁石を思わせる形状で安山岩が検出されている。石棺墓の全体的配列からこの地に石棺墓が存在したことは疑う余地がないと思われるし、石棺墓一基分に匹敵する石塊が認められ石棺墓の配列と墓制の考察上第５号石棺墓として記載した。

第６号石棺墓（第８図）

Ｂ－６・７で検出したが若干Ａ－６にも及んでいる。主体はＢ－６・７に跨っている。平面プランは長方形を呈し、北東壁の壁石は50cm大の板状の安山岩を長軸が横となるように１枚設置してある。対壁の南西壁には40cm大の板石を２枚重ねに配置していたようである。北西壁の

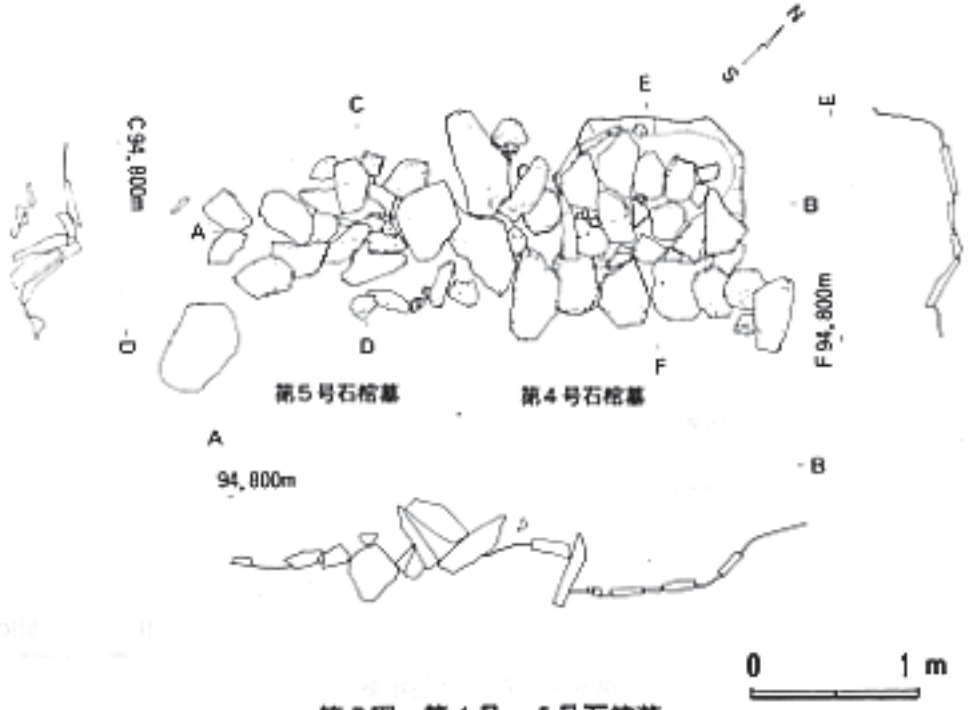



第６図　第３号石棺墓

壁石は40㎝大の平石を６枚設置し、隙間には10㎝大の安山岩を配置してあるが壁石の一部は石棺内に傾斜している。対壁の南東壁には40㎝大の安山岩を長軸を横に設置し、ほぼ垂直に貼り付けている。縦の壁石と横の壁石のコーナーすなわち北東壁・南西壁コーナーには５～10㎝大の安山岩を配置し、コーナーの隙間を埋めてある。底面には40～50㎝大の板状の安山岩を敷きつめほとんど隙間がないように組み込まれてある。石棺内の計測値は長辺が120㎝、短辺が70㎝、深さが40㎝ほどである。掘り方も明瞭に部分的に確認できた。

第７号石棺墓（第９図）

今回の発掘調査で新たに検出した石棺墓で、保存状態は比較的良好とはいえない。A・B－7・8で検出したが、B－7が主体である。蓋石は、石棺の上部を完全に覆っており120㎝×150㎝の範囲に蓋石が存在する。蓋石は、概ね40㎝大の板状の安山岩を用い２重、３重に積み重ねられている。蓋石除去後の平面プランは、ほぼ長方形を呈するが、南東壁が存在しない。北東壁の壁石は40㎝大の板状の安山岩を２枚組み合せ構築してある。対壁の南西壁は40㎝大の略三角形の板石を長軸が横方向となるように設置してある。北西壁は40㎝大の安山岩を３枚組み合せ壁石としてあったようであるが、石棺内に横転した状況で検出されている。また壁石が長軸を横にして設置してあるため２～３枚の板石を貼り付けて北西壁を構築してあったようだ。対壁の南東壁は確認することはできなかったが、40㎝大の板状の安山岩が２枚崖傾斜面に横転しており本来は壁石に使用された安山岩と考えられた。底面は30～40㎝大の板石を敷いてあるが、第１号石棺塞から第６号石棺墓と異なり底面全体に板状の安山岩が認められず南東壁同様底石も壁石の崩壊に伴い、ずれた可能性が高いと考えられる。




第7図　第4号・5号石棺墓

**7. 出　土　遺　物**（第10図1～12）

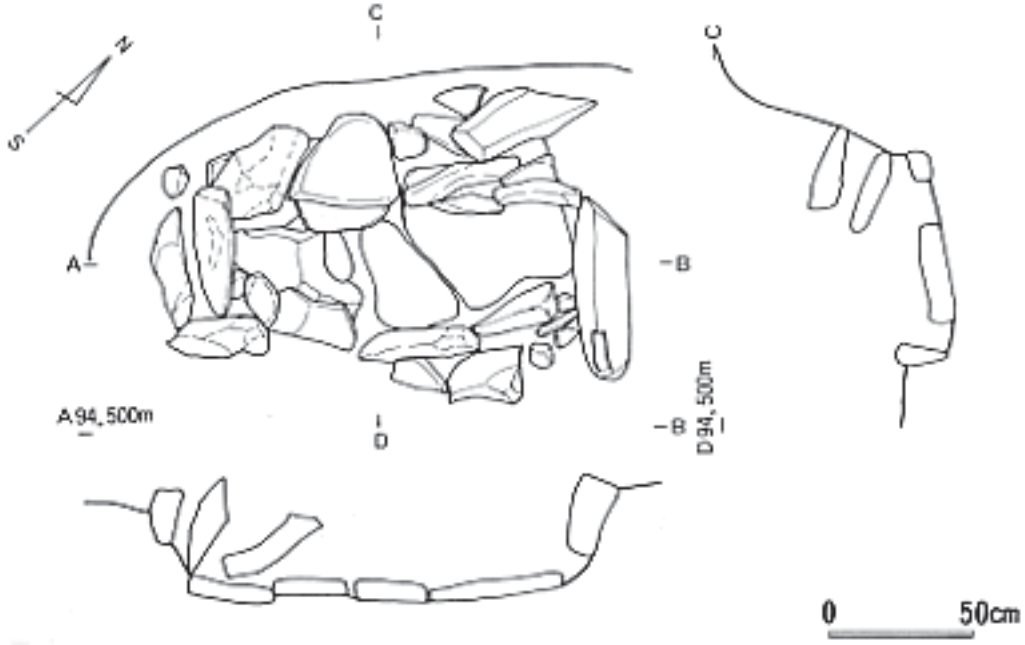
今回の調査で出土した遺物は、縄文時代後期の土器片が大半を占めていた。しかし出土量は僅少である。土器はすべて破片で、昭和48年の発掘調査の際出土した甕棺の残りの破片と思われるものが第4号石棺から3片発見された。石器と石製品はあわせて4点出土しただけであった。

（1）　土器

本遺跡で出土している土器を時期別に分類すると、後期前葉（十腰内Ⅰ群）と後期末葉（十腰内Ⅳ・Ⅴ群）に分けられる。

（ア）　後期前葉の土器（第10図1～5）

第10図1～4は甕棺の同一個体の破片である。1～3は第4号石棺から出土し、4は第7号石棺から出土した。この甕棺の破片はいずれも胴部最張部の部分のもので、文様は胴部最張部に横走隆起帯を1条施し、その横走隆起帯の上限にボタン状の粘土塊の貼り付けを施している。また、焼成後に赤色塗料を施した痕跡が認められる。色調は黄褐色を呈し、焼成はきわめて良好である。器厚は約0．8㎝で、胎土の中には石英粒が多量に含まれている。この甕棺には縄文や、沈線は施されていない。第10図5は第1号石棺より出土したもので、底部の底にあたる部分の破片である。底面には広葉樹の葉痕が施されている。色調は赤褐色を呈し、この破片も甕棺と同じく胎土には石英粒が含まれている。焼成は良好で堅緻である。




第8図　第6号石棺墓

（イ）　後期末葉の土器（第10図6～8）

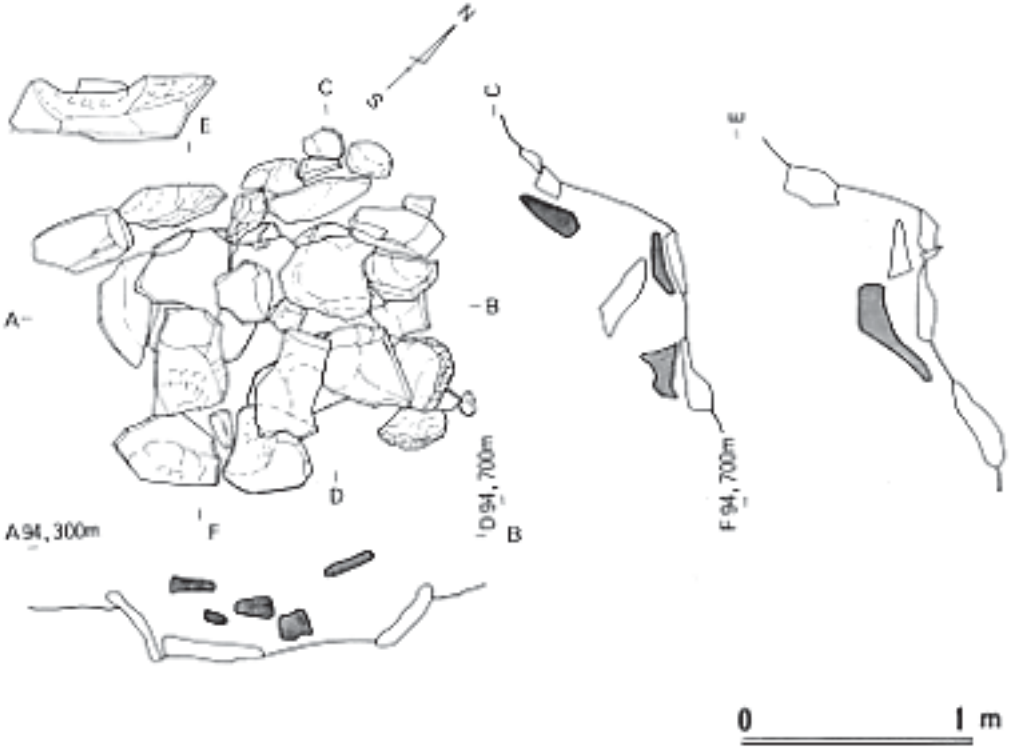
第10図6は第1号石棺の北壁の外側より出土した。器形は深鉢形を呈すると思われる口縁部の破片である。口縁部は肥厚で、器面にはR＜$\frac{L}{L}$の縄文を施している。色調は黄褐色で、焼成は良好である。第10図7も第1号石棺の北壁の外側より出土した。器形は深鉢形を呈すると思われる胴部の破片である。器面にはR＜$\frac{L}{L}$の縄文原体を垂直方向と横方向を交互に施している。節のない羽状縄文である。色調は赤褐色を呈し、焼成は良好で堅緻である。第10図8は第2号石棺より出土したもので、注口土器の注口部分にあたる破片である。色調は黄褐色で、焼成は脆い。胎土には石粒が多量に含まれている。

（2）　石器（第10図9～11）

出土した石器は3点で、石匙はいずれも不定形な形態で剥片に簡単な剥離を施したようなものである。これらの石器がどの時期に属するかは明瞭ではない。

（ア）　石匙（第10図9・10）

第10図9は第1号石棺の外側より出土した。剥片の側縁に剥離工程を粗雑に施しただけのもので、機能的には石匙に属するものであろう。石質は珪質頁岩である。第10図10も第1号石棺の外側より出土した。自然面を三角形に粋いて作ったものである。そして自然面が残っている部分も見られる。頂点に打痕がある。石質は頁岩である。




第9図　第7号石棺墓

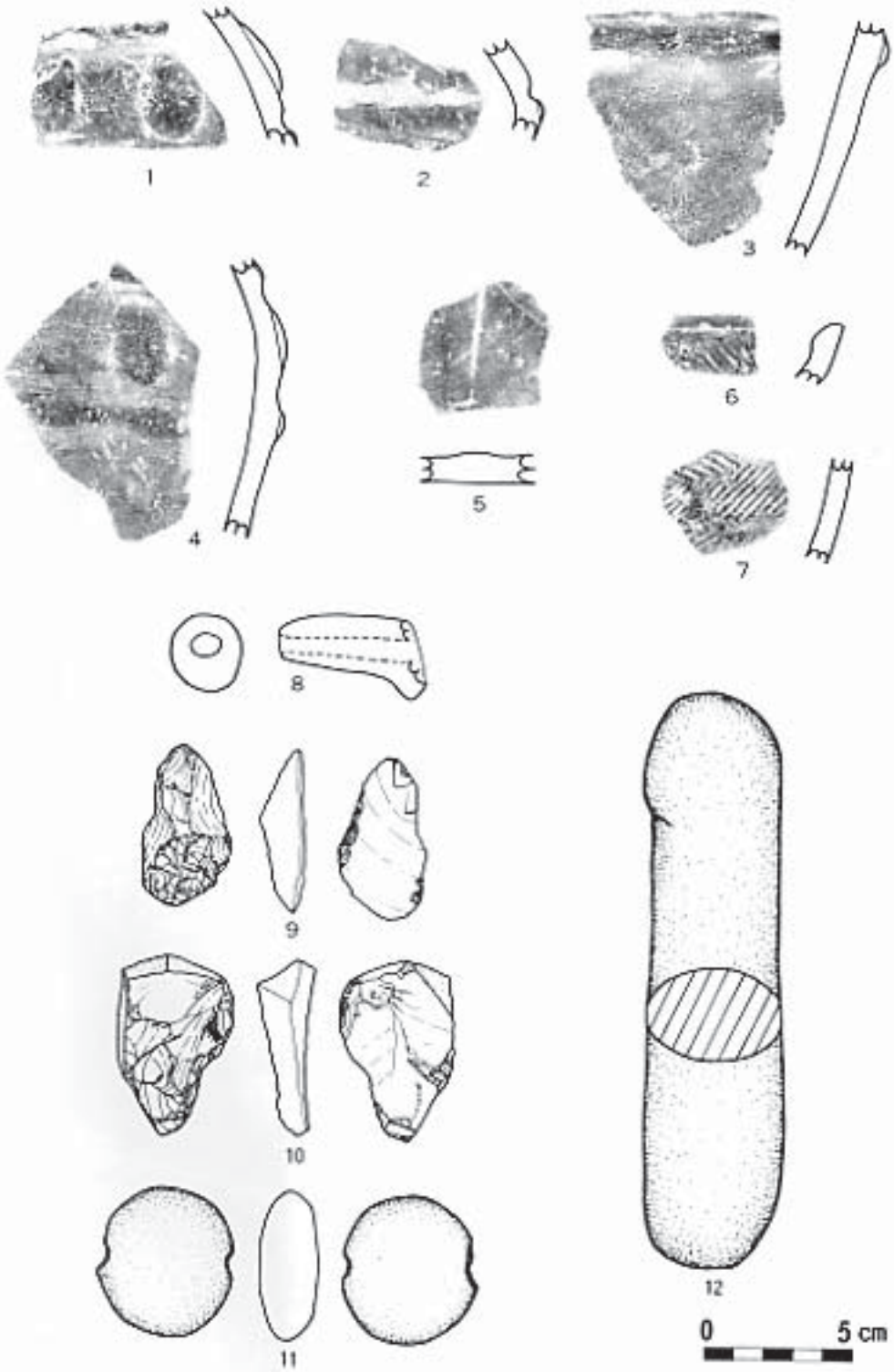
（イ）　石錘（第10図11）

1号石棺の北壁の外側より出土した。川原石を利用したもので、短軸の両端を打ち欠いて、その後擦って欠いたところを磨いたようになっている。重量は80gで、石質は頁岩である。

（3）石製品（第10図12）

（ア）石棒

第10図12は、1号石棺北西壁より出土した。形は細長く、頭部と身部を区画しているかのようにに見える。これは川原石をそのまま使用したらしく、加工した痕跡は見あたらない。石質は安山岩である。




第10図　出土遺物

## 8．ま　と　め

今回は石棺墓の調査が主体であったが、こうした石棺墓は本県では鯵ヶ沢町餅の沢遺跡、平賀町堀合１号、同Ⅲ号遺跡で発見されており、時期は縄文時代後期初頭が主流のようである。本遺跡の石棺墓の造営時期も先年に調査した江坂輝弥氏によれば、縄文後期初頭の甕棺群とほぼ併列した状況にあるので後期初頭とみなしてよいであろうという見解を述べている。石棺に利用されている石材は遺跡の周辺から供給したもので、板状に節理したものを選び出している堀合遺跡などで発見されている石棺の規模から見れば小型であるが、それでも遺体を屈葬にすれば充分な容積である。底面に敷石が認められることは他に例はなく、蓋石も積石塚を呈していることから、掘合式石棺とは異なり、山野峠式石棺と仮称しておきたい。また遺跡の立地においても山間の鞍部を利用している点で他と異なり、他に例がない現在では特異な存在となっている。ただし、甕棺墓と隣接している例は掘合遺跡と同類であり、今後追加例が発見される可能性がある。

終わりにあたり、山野峠遺跡の性格について纏めてみたい。

(1) 本遺跡は縄文時代後期初頭の集団墓地である。

(2) 墓の形態には再葬甕棺墓と積石塚組石棺墓の二形態が認められ、両者の間に再葬（洗骨？）風習による有機的な関係が考慮される。

(3) 再葬甕棺は石室状組石遺構に安置されている特徴があり、他の遺跡には例がない。

(4) 遺跡の地形および出土遺構、遺物からみて、住居の存在は考え難く、居住区は別な場所に営まれていたものと考えられる。

(5) 本遺跡の墓の規模は、堀合遺跡と共にこれまで発見されているこの種の墓遺構の中では最も大きいものである。

〔参考および引用文献〕

①喜田貞吉（1934）「青森県出土洗骨入土器」 歴史地理　第63巻　第6号

②江坂輝弥（1967）「青森市久栗坂　山野峠遺跡調査略報」 考古学ジャーナル　No.13

③葛西　励（1975）「青森市山野峠石器時代墳墓遺跡について」 北海道考古学　第11輯

④葛西　励（1974）「青森県平賀町唐竹地区埋蔵文化財発掘調査報告書」平賀町教育委員会

**写真１　遺跡全景（航空写真）**

宮田（南側）より

久栗坂（北側）より

**写真 2　遺跡遠景**

**写真３　調査スナップ**

石棺墓の配列

第１号石棺墓

写真４　石棺墓の配列・第１号石棺墓

第 2 号石棺墓

第 3 号石棺墓

写真 5　第 2 号・3 号石棺墓

第 4 号石棺墓

第 4・5 号石棺墓

写真 6　第 4・5 号石棺墓

第 6 号石棺墓

第 7 号石棺墓

写真 7　第 6 号・7 号石棺墓

**青森市の埋蔵文化財 11**

**山　野　峠　遺　跡**

発　行　日　：　昭和 58 年

発　行　者　：　青森市教育委員会